西と東――関西亡命
住い――楽園放浪
食べもの――美味大食
芸――地唄礼讃
女――王朝夢現
続・西と東――東西異土

関西

谷崎潤一郎にそって

多田道太郎
安田武

ちくま
ぶっくす
39

関西

谷崎潤一郎にそって

多田道太郎
安田　武

ちくま
ぷっくす
39

著者紹介

多田道太郎氏は1924年京都に生まれる。京都大学人文研究所でフランス文学を研究するかたわら，オリジナルをもたないコピーの存在と意味を追求した「複製文化」論，しぐさのなかに日本人の感覚を読みとる独自の文化論を展開。著作多数。

安田武氏は1922年東京生まれ。「学徒不戦の誓い」を発表し，わだつみ会の運動に加わる。その代表作に『学徒出陣』がある。また日本の伝統文化の伝承に深い関心を寄せ，『芸と美の伝承』『型の文化再興』を著わす。

両者による共作はこの『関西』が三度目で，他に『日本の美学』（ぺりかん社）『「いきの構造」を読む』（朝日選書）があり，いずれも日本人の美意識を追求したものである。

関西　谷崎潤一郎にそって

1981年11月30日　初版第1刷発行　Printed in Japan

ちくまぶっくす 39

著者　多田道太郎　安田武

発行者　布川角左衛門

発行所　株式会社 筑摩書房

101—91　東京都千代田区神田小川町2—8
振替 東京6—4123　電話 東京（291）7651（営業）
（294）6711（編集）

0395—05039—4604
©Michitaro Tada　Takeshi Yasuda
明和印刷・和田製本

乱丁・落丁の場合は，御面倒ですが小社読者係あてに
御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目

次

西と東の章・関西亡命……3
東京人・谷崎潤一郎　6
西と東の夢の交換　21
暗号通信　27
京阪神　34
住いの章・楽園放浪……49
阪急岡本・京都下鴨　53
「私の見た大阪及び大阪人」　66
闇と翳　77
食べものの章・美味大食……91
うまいもの　95
鯛とビフテキ　100
関西料理と谷崎潤一郎　109

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

芸の章・地唄礼讃……121
「雪」「残月」 125
大阪の声と言葉 139
芸の力 146
傀儡(くぐつ)まわし 155
女の章・王朝夢現……165
人形 169
松子夫人 176
謎縹渺 189
続・西と東の章・東西異土……203
あとがき

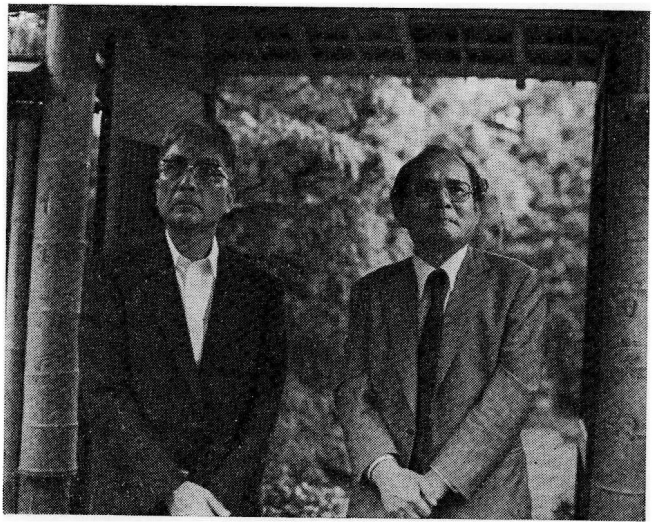
関西

谷崎潤一郎にそって

本書は、エッソ・スタンダード石油株式会社広報部発行の「エナジー対話」第18号によるものです。同社のご好意に感謝いたします。

筑摩書房編集部

西と東の章・関西亡命



後の潺湲亭にて　左は安田武氏、右が多田道太郎氏

安田　谷崎潤一郎によって「関西」を語るという、このテーマは、多田さんが言い出したのではなかったかしら。三年ばかり前にこの対話シリーズで『「いきの構造」を読む』（『エナジー対話』10号・朝日選書）をやった。その打上げのとき、このつぎは谷崎潤一郎の関西というのはどうやろ、と、たしかあなたが言って、それは面白い、と僕が即座に相槌を打った。そんなふうに記憶してますがね。

九鬼周造の『「いき」の構造』をもとにして「いき」の問題を話しているうちに、これはどうしても江戸の美意識だ、上方の美意識は「いき」では割り切れない、それはいったい何だろう、というような話になった。そもそも九鬼さんは東京生まれ東京育ちで、それから十年余りヨーロッパで生活して最後は京都大学教授になって、京都で生涯を終えられるのだけれども、ついに「京都ふう」あるいは「関西ふう」に染まらなかった人ですね。

ところが谷崎は、これもチャキチャキの江戸っ子、東京っ子だったのが、関東大震災のとき東京を逃げ出し、そのまま関西に住みついて、上方の文化に次第に自分を同化させていった。「関西」をとりこむことによって、ああいう独自で偉大な谷崎文学をつくりあげていった。

だから、おそらく、谷崎の文学を丹念に読んでみれば、「いき」とはちがう上方の美学というものが、わかってくるのではなかろうか、と、そんなふうな漠然たる話からはじまったのでしたね。

多田　関西論というのは、上方の人間はよくやるのですよ。日本人が日本人論の好きなように、ね。上方の遊びの研究とか、京都・大阪・神戸の比較とか、いろんなことをやっている。統計数

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

字をつかった調査をしたりしているんだけれども、正直なところあまり面白くない。数字でまとめようとしては文化論はうまくいかんのじゃないかと思うし、また、そこに住んで利害関係を持っている人間がやったのでは面白味に欠けるところがある。

たとえばラフカディオ・ハーンの日本論というのは僕はすばらしいものだと思うのですが、それは彼が日本人じゃなかったからできたのではないか。おなじように関西論というのも、関西人じゃない異郷人の目、よそものの目で見るのが有効ではないかと思うのです。谷崎潤一郎という人は関西にとってはよそもので、しかし結局、関西に夢を持って生きた人だった。いわば関西ファンですね。愛情をもって関西を見てくれた人だった。安田さんもまた、そういう人のひとりである。その安田さんと一緒に、谷崎文学を介して「関西」を語ったら、これは面白いだろう。どちらが言い出したのか記憶は曖昧なんだけれども、そういう予感がありましたね。それにこの企画は、安田さんと僕のコンビの三回目でしょう。『日本の美学』(『エナジー』23号・ぺりかん社)『「いきの構造」を読む』につづいて、三部作のしめくくりとしてぴったりだと思った。

東京人・谷崎潤一郎

安田　ところがこの問題を考えはじめてみると、実はもうひとつ厄介な問題が、それ以前にあることに気づかざるをえなかった。というのは、私たちは普通、ごく無造作に、「江戸と上方」と

か「関東と関西」とか言ってますね。しかし、江戸あるいは関東というのは、たいして問題はないのだけれど、上方あるいは関西のほうは、ことがらがそう簡単ではない、ということね。一口に関西といっても、京都と大阪と、さらに神戸と、それぞれ文化圏としてかなり異質なものだ、ということがあるわけでしょう。

それを僕がつよく感じたのは、富士正晴の『贋・久坂葉子伝』です。解説を書くために三度目の読み返しをしていたとき、ハタと気づいた。この小説の舞台は主として大阪で、必要に応じて神戸の三の宮や元町が出てきたり、京都もちょっと出てくるけれど、女主人公久坂葉子はまさに神戸の女なんですね。神戸の女でないと、その感じが出ない。京都の女でも、大阪の女でもないのです。

登場人物で言えば、この久坂葉子が神戸に住み、作者富士正晴らしき木ノ花咲哉は大阪と京都の中間あたりに住んでいて、勤め先は大阪。久坂葉子の最初の恋人になる放送局員、悪がしこくて小ずるい感じの鬼頭が大阪の人間。彼女の最期の自殺の原因になる声優、純情で傲岸でやや偏屈な御津村は京都。久坂が仮りの婚約をする相手の、音楽青年くずれで香水づくりの商人、しかもどこか品のある田村は、須磨の海岸ちかくに住んでいる。実にうまくいってますねえ、この人物配置は……。偶然なんでしょうが、それだけにかえって、何か宿命的な感さえありますよ。

そう思って、谷崎潤一郎の、たとえば『蓼喰ふ虫』を読み直してみると、主人公の要(かなめ)の本拠は芦屋でしょう。細君の恋人は須磨で、父親の老人とその正妻か妾かわからないけれど、お久は京

都ですね。要は、東京生まれの細君にすっかり厭気がさして、一方でお久のような女に魅力を感じながら、神戸の白人娼婦のところへ遊びに行ったりしている。

こういう図式ですね。一口に関西といっても、これは、かなり厄介な問題ですよ。

多田　京阪神がちがうというのは、おっしゃるとおりで、関西の人間もみんなそう思っているんです。ただ、言うことがわりあい常識的で、京都はおっとりしているとか、神戸はハイカラだとか……。それはそうなんだけれども、それを文化論として深めるということが、いまのところできていない。この対話でもどれだけのことができるかわかりませんが、ひとつの課題ですね。

おいおいそちらに行くとして、私事にわたって恐縮ですが、まず谷崎潤一郎と私との因縁みたいなことを申し上げますと、私の生まれた家のとなりが谷崎さんの家だったんです。私は大正十三年生まれですが、その前の年の関東大震災で関西に移住した谷崎さんが、はじめしばらく京都におられて、まもなく神戸に移って家をお持ちになった、その家ですね。僕が生まれたとき、谷崎さんがお祝いに産着をくださったそうです。

安田　年譜に「兵庫県武庫郡本山（もとやま）村北畑」とある家ですね。

多田　ええ。阪急電車の岡本のちかくです。芦屋・岡本・御影といったあたりが、明治の終りごろから大正にかけて、新興の住宅地として開けてきて、私の祖父がその一画の本山に大正七年ごろ家をつくったのです。そのとなりに四軒ばかり貸家を持っていて、そのうちの二軒を谷崎さんが借りられたのが、大正十三年三月。

大正十二年の九月一日、谷崎さんは箱根で大震災に遭われて、東京の家族はどうしているかと心配されるのだけれど、さいわいご家族みんな無事で、東京で再会して船で神戸へ向われたのですね。

安田　箱根から沼津経由で汽車でいったん神戸へ出て、そこから船で横浜に入り、震災後十二日目にやっと東京へもどって、もう一度船で神戸へ行くのでしょう。

多田　ところが神戸というのは交通の都合で来ただけで、目あての土地ではなかったようですね。はじめは京都の等持院あたりにほんの一カ月ばかり住み、つぎに東山三条の日蓮宗のお寺に身を寄せ、震災から三カ月ばかり経た十二月、気候風土のいいところというので六甲の苦楽園万象館というところに移転しておられる。万象館というのは旅館のようですが、この当時小山内薫が苦楽園に別荘を持っていて、その関係であそこに目をつけられたのじゃないかと思いますね。

震災のあとは罹災者が大挙して関西に押しかけた。とりわけ阪神間が多かったようです。横浜で罹災した外人たちも神戸の外人たちの伝手をさがしてどんどん阪神間へ行ったそうだし、文化人もずいぶんあのあたりへ避難した。関東からの植民地といった雰囲気があったようですね。ただ、そのなかで、その後ずっと関西に住みついた人というのは、有名人では谷崎潤一郎ただ一人じゃないでしょうか。

安田　そうですね。大阪の北の「いかり」の女将は、東京の築地から震災のとき逃げていった人ですがね。作家では谷崎潤一郎だけでしょう。

多田　谷崎さんも苦楽園での仮住いだけですめば、単なる罹災民だったのだけれども、翌大正十三年の三月に、本山村字北畑、つまり岡本に本格的に腰を据えられた。私の家のとなりの家ですね。

阪急岡本駅でおりて海のほうへ向うと、国鉄の摂津本山駅があるのですが、そのなかほどを東へすこし行ったところに本山第一小学校があって、そのとなりが谷崎さんの住まわれた家です。

ついでに言いますと、当時の谷崎さんの奥さんは、のちに佐藤春夫夫人になる千代さんで、谷崎さんの末の弟の終平さんが結核療養中だったようです。うちとは近所付き合いで、叔父や叔母がよく訪ねていたそうです。叔父の話では、叔父が小学生のころ、『大鏡』とか絵入りの『源氏物語』とか、千代夫人から借りたこともあるということで、その叔父がのちに戦争中、断絃会というのをやっていて、そこへよく谷崎さんをお呼びしたということもあります。叔父の多田侑史が武智鉄二さんなんかとやっていたその断絃会というのが、関西での古典芸能を支える一拠点になっていたんです。

私が谷崎さんにお目にかかったのは、戦後すぐ、その叔父の使いで南禅寺のすぐそばのお宅を訪ねたときです。なかなかいいお家で、玄関を上がったところに応接間があって、そこに永井荷風の本だけがぽつんと置いてあったのが妙に印象にのこっているのですけれど。

そのあと、金剛能楽堂で一度お目にかかりましたね。こちらは学生で向うは大先生なんだけれども、先生のほうが恥ずかしそうにしておられた。谷崎さんに『客嫌い』というエッセーがあり

ますね。客が来ると猫が尻尾をプンと振って、そのまま横を向いて知らんふりをしている。人間も猫みたいに尻尾があって、尻尾をプンと振って、あと知らん顔がしていられたらどんなにいいだろうという話ですが、谷崎潤一郎には、そういう恥ずかしさと気むずかしさとが一緒になっているところがあるでしょう。

安田　それは、東京人に独得のはにかみなんですよ。

多田　非常なはにかみ屋だったようですね。いろんな人がそう書いている。

安田　ご自分でも書いてられますね、たとえば『当世鹿もどき』というエッセー。だいたい東京の人間というのは、はにかみ屋なんです。岡本文弥さんが泉鏡花の作品をいくつか新内に作曲していて、鏡花のことを随筆に書いていますが、そのなかで、鏡花の小説に出てくる江戸っ子はポンポン啖呵を切って威勢がいいけれど、根っからの江戸っ子はあんなにポンポン啖呵が切れない、もっとはにかみ屋だと言ってます。岡本文弥は江戸っ子ですが、鏡花は金沢の人間ですからね。そこはちがうのですよ。

広津和郎さんが、やはりはにかみ屋でしたね。僕が「広津和郎論」でそのことを書いたら、桃子さんからお手紙で、父はいつも、僕からはにかみをなくしたら何が残るかと言っていた。そのくらいはにかみ屋だった、と言ってこられましたよ。やっぱり……、と思いました。

江戸っ子のはにかみでは、もうひとつ面白いエピソードがあります。僕の友だちで中学生の頃から仲よくしている男がいるのですが、これが神田で十五代目というパリパリの江戸っ子なんで

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.